

令和 3 年 6 月 13 日現在

機関番号：37111

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K01201

研究課題名(和文) 中国の広場ダンスが創出する社会関係と親密性、「人」のイメージに関する人類学的研究

研究課題名(英文) The study of social relationship and intimacy that created by Square Dance in China: Anthropological perspective for <Person> image of contemporary China.

研究代表者

田村 和彦 (Tamura, Kazuhiko)

福岡大学・人文学部・教授

研究者番号：60412566

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、近年、中国において広く普及した「広場ダンス」を対象として、人々の集まりが現象化する構成原理を考察した。具体的には、複数のダンスグループへの参与観察およびグループの歴史についての口述史を資料として、人々の集まりが生成、維持される状況を考察した。その結果、中国に関する人類学研究が明らかにしてきたように、これらのグループを構成する原理が、人々が明確な輪郭を持つ「集団」としてではなく、柔軟な関係性の束として考えられることを指摘すると同時に、その手段としてSNSの利用といった現代社会の技術的側面や現代中国における人々の流動性の拡大、「幸福」観を背景に急激な普及をみたことを分析した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、現代中国に広くみられる「広場ダンス」という、公園や街角に朝夕決まった時間に集まり音楽に合わせてダンスをおこなう集団を事例として、中国における人々の集合のありかたを考察した。併せて、そこに現れる様々な参加、継続動機や意義を収集、分析することで、現代中国において新たに再構築されつつある「幸福」感や、理想的な「人」のありかたを検討した。本研究は現代中国における人的紐帯と価値観をめぐる事例研究という限定的な研究ではあるが、その展望として、より広く、人々のつながりのありかたを探求する一助となりうる可能性があるものと考えられる。

研究成果の概要(英文)： This study examines "Square Dance(Guangchang Wu)" a widespread phenomenon in contemporary China, from the perspective of cultural anthropology. Specifically, this study based on the accumulation of anthropological studies on China on the constitutive principle of people gathering. What they suggest is not a "group" with clear individual affiliations, but a loosely bounded collective that activates a bundle of relationships each time. In the process, I incorporated the technological aspects of SNS use and the situation of modern China, which is in the process of becoming more fluid, into my study. Using the concept of intimacy, I pointed out the existence of networks that encourage people to come together, and that these networks are closely related to people's "well-being(Xingfu)" and the concept of "people(Ren)" that are being reconstituted in contemporary China.

研究分野：文化人類学

キーワード：中国研究 民俗学

1. 研究開始当初の背景

中国における人類学的な現地調査は、従来、比較的固定化された対象(村落、宗族など)を中心に調査がおこなわれてきた。その理由の一つとして、安定したメンバーシップをもち、固定した場を共有する対象への関心が高かった、ことをあげることができる。その一方で、すでに、費孝通の「差序格局」(1948)、未成道男の「選択的關係操作論」(1983年)、王崧興の「關係あって組織なし」の議論(1986、1987年)などに代表されるように、中国における人間関係構築の論理が、けっして安定したメンバーシップに基づく自動性の高いものではなく、個人を起点とした柔軟性の高い関係性の束としてあり、状況に応じてその一部が活性化される特徴が指摘されている。とくに、職と生活が一元的に管理される「単位」(danwei)制度が弱体化し、人々の流動性が急速に高まった1990年代以降の中国社会において、これらの指摘はより重要な意味を持つ、と考えられる。未成らの研究群は、その重要な指摘にもかかわらず、一部の研究を除いて(例えば、櫻田涼子による「関係性をつむぐ」はその中において重要な研究である、櫻田:2009)、本研究構想時点では十分な展開を得ていなかった(この「つながり」のありかたについては、この数年で優れた研究が世に送り出されている。例えば川瀬:2019など)。

一方で、こうした関係のネットワークを社会資本として考察した、ブルデューやパットナムの議論から展開した Nan Lin(2001)の研究に現れているように、社会学的研究においても類似の関心を持つ議論が増加する中で、新たな文脈のもと、現代中国における具体的な対象を考察することを構想した。

本研究は、こうした、個人を起点とする関係性のなかで構築され、緩やかなメンバーシップを持つ対象として、「広場舞」(Guangchangwu、以下「広場ダンス」と表記)を具体的な研究対象に設定した。「広場ダンス」は、当初は、健康増進を目的として、従来の民間舞踊にエアロビクスなどの有酸素運動の要素を加えた動作に改編した形態で普及が図られたダンスである。この、流行歌を伴奏とする集団ダンスは、2007年ごろから中国全土で急速に広まり、現在では、社会問題を引き起こしつつも、公園や街頭などに、多数のグループが形成され、早朝および夜間のダンスに取り組む様子が見られる。これら集団ダンスのグループは、「大媽」と呼ばれる世話係たちによって主催されている。

この「広場ダンス」は、ダンスの形態や健康といった側面から考察されてきたが、本研究では、ここにみられる「大媽」を核心とする緩やかな集団化のありかたと、中国の人類学研究が明らかにしてきた廟の信仰における「霊」(Ling)を核心とする人々の集結のありかたや世話係の機能との類似性を見出し、その組織の構成についての研究を目的とした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、従来、文化人類学的なアプローチが皆無であった「広場ダンス」の調査、研究をおこなうことで、そこでの人間関係のありかたを明らかにし、どのような「人生」(rensheng)が理想とされ、追及されるのか、という現代中国における「人」のありかたを考察する端緒を切り開くことにある。

この研究は、主に二つの方向性をもつ。

- (1) 従来の人類的中国研究では、十分な検討がおこなわれてこなかった、流動的でメンバーシップの緩やかな、関係性の束の一部を活性化させ、創造してゆくことで形成される対象を焦点として考察することで、すでに未成や王が指摘した問題を再び議論の俎上に載せ、実践的で非固定的なコミュニティについての人類的中国研究をより深化する。その際に、近年議論の蓄積が進む、スマートやキプニスらの社会学的アプローチによる中国理解(Smart:1993,Kipnis:1997)と、それらの影響のもとに中国において進行している欧米の人類的アプローチ、および身体を用いた実際のダンスの場を視野に含めつつ、他方で、SNS(とりわけ、WeChatの「朋友圈」(モーメント機能)、「土豆網」などの動画の配信、共有サイトの活用)といったメディアの使用による関係性の拡張についても目配りする。
- (2) 「広場ダンス」に関する先行研究では、ダンスの様式に基づく系譜的な研究や健康面への影響が主要な成果となっており、本研究の目指す社会関係の構築という側面は、十分に考察されてこなかった。個人のネットワーク形成の点からこの問題を研究することで、流動化する社会への、人々による自発的な対応としての「広場ダンス」活動という側面をミクロな視点から検討する。なぜ、経済的な利益の発生しない自助、共助グループへの日々の継続的参加がおこなわれるのか、そこにみられる様々な動機が現在の中国における「人」についてのある種の価値観を表出していると予測されることから、本研究では、「広場ダンス」を通じてみる、現代中国における「よりよく生きること」、「幸福」をめぐる研究への研究軸を開拓してゆく。

3. 研究の方法

研究方法は、主に、以下の二つの方法をとった。

(1) フィールドワークによる参与観察(中国陝西省西安市、江蘇省南京市)

「広場ダンス」の実践グループに加入し(朝のグループ1つ、夜のグループ1つ)、事前準備、休憩、終了後の談話のなかで調査を進めた。陝西省西安市の2グループを主要対象とし、陝西省咸陽市、江蘇省南京市の1グループについても一時的に参加した。また、すでに解散したグループの形成から解散までの歴史に関する口述史調査、現役のそれぞれのグループの「大媽」たちへのインタビューをおこなった。

(2) 「広場ダンス」のSNSグループ、「大媽」たちの「朋友圈」への参加による継続調査

「広場ダンス」のグループのうち、SNSの「朋友圈」を持つ場合はこれへの参加、また、「大媽」の「朋友圈」への参加を通じて、実際にダンスに参加できない期間、どのような情報がやり取りされているのかを観察した。

4. 研究成果

本研究の結果、以下の事柄を明らかにした。

多くのグループのダンス参加者は、これら「大媽」によって主催されるグループに、伴奏となる音楽や振り付けの動作、そして「大媽」との相性を見ながら好みに応じて選択的に参加する。一般の参加者たちは、ダンス集団の周辺部での見学、周辺部で動作を真似る、踊ることができるようになった曲のみの参加といった参加形態がみられた。こうした周辺の参加を経て、一部の人々は、ダンスの習熟度や人間関係が「熟」してゆくことにより、より中心部に近い部分へとダンスをおこなう位置取りを変えてゆく。よって、グループ内でのおおよその位置づけは結果的に可視化されており、人間関係が「熟」してゆくなかで声を掛け合う頻度も上がり、毎日参加する人々の間では、ダンスの合間に様々な個人的な情報を含む「おしゃべり」も展開するようになる。

ただし、揃いのユニフォームを着る、ダンスの精度をあげて動画配信をおこなう、イベントの機会にダンスを披露するようなグループを除くと、周辺のメンバーは固定しておらず、会費(ステレオなどの電気代、夜間のダンスグループであれば照明の電気代などに充てる)を徴収するグループであっても、名簿に登録されている人数よりも多くの人々の参加がみられる。また、複数のグループでのダンスに参加する人々も見られ、境界がほとんど見えない参加資格の緩やかな集団のありかたが観察された。

調査開始時にはすでに、「広場ダンス」の爆発的な拡大時期は終了しており、新規のグループは、特定のダンス様式に特化したもの(傣族やウイグル族などの少数民族の舞踊、社交ダンス、ジルバなど)、大規模グループが分裂したものなどに限られた。

大規模グループが分裂する際、またダンスの場所取りの問題(ダンスのために必要とする空間だけでなく、集団の距離が近いことで双方の音楽が入り混じるといった問題が起こる)などにおいては、ダンスグループの所属や参加者数が問題化する事例も見られたが、多くは「大媽」同士の話し合いで決着することが多く、集団の輪郭を明確化してゆく力学以上に、「大媽」の求心力が顕在化する機会となっている。

ダンスグループの選曲や振り付けは、「大媽」たちにより決定される。この、曲目と振り付けは、それぞれのグループの目指す方向性が顕著に表れる場であり、「大媽」の「声かけ」が少なく時間外にも各自で練習を積み、より複雑な振り付けを通じて高度な所作を身につけるグループ(これを調査者は「修行系」と呼ぶ)、曲目のテンポが遅く激しい動きを少なくすることで参入しやすく、続けやすいグループ(これを調査者は「仲良し系」と呼ぶ。)、大媽の頻繁な「声かけ」のもと、同じ曲を繰り返し踊り参加者の一体感を高めてゆく(これを調査者は「部活系」と呼ぶ)などがある。この、選曲や振り付けに関する各グループの特徴は、自らのグループを説明する際にも頻繁に用いられる。もっとも集中的な調査をおこなった2グループは「仲良し系」に分類できるグループであり、他のグループは、インタビューや観察のみにとどまった。その理由として、「修行系」や「部活系」のグループでは、通年の参加が一般的だが、調査者の調査方法では、夏季、冬季の一定時間の参加しかできなかったためである。

通常、「大媽」や習熟度合いが高く、関係性の良い人々が前方でダンスをし、それを後方に並ぶ人々が見ながらダンスが進む。ただし、ダンスの振り付けによっては前後が逆になる部分があり、その場合、習熟度合いが低い人々は模範を目視できないため、混乱することも起こる。「大媽」たちは、こうしたパートに差し掛かると、前列を離れて、踊りながらグループの周囲を回り、アドバイスをおこなうことがある。特に命名されてはいないが、こうした「声かけ」の頻度や適切さは、人柄と並んで、「大媽」の評価に関わる。

調査グループの一つには、グループのダンスが円滑に進む、日々上達できる工夫として、すべての曲目のダンスの振り付けを、左右逆の動作でできるように(つまり、前方に立ち対面でダンスをおこないつつも、動作が模範となる)練習をする「大媽」もいた。この事例にみられるようなこうした微細な配慮は、「大媽」の評価を高め、結果的にその「広場ダンス」の長期継続にもつながっていると考えられる。

新たな楽曲の導入にとまなう新規の振り付けについては、実際の「広場ダンス」の場での「大媽」と核心メンバーによる模範演技を通じて普及させるグループと、事前に参考とする振り付けを動画配信サイトを利用してメンバーに配信する(この場合は、すでにある他のグループの所作を模倣してゆくことになる)グループに分かれた。新規の振り付けの学習以外にも、動画配信サイトに挙げられた全国各地の「広場ダンス」グループの動画は、頻繁に閲覧されており、グルー

プ内でそれぞれのグループ(お互いに面識のないグループ同士)のダンスの所作や楽曲の選択や曲目のつなげ方などへ評価が与えられている。

この、インターネットを介したダンス学習、模倣の影響力は想像以上に大きく、これが毎年新たな流行歌をすぐに採り入れ、振り付けをつけてゆく傾向と、全国的に類似の振り付けがみられる理由となっている、と考えられる。

特定の舞踏を専門におこなう「広場ダンス」グループや各地のイベントの際に招聘されるグループなどを除くと、ダンスの専門的なトレーニングを受けた人物がそのまま「大媽」になる、あるいはそういった人物を時給により雇用することは一般的ではなく(ダンスの「老師」を雇用する場合、または、「老師」が主催して生徒を募集する「広場ダンス」の場合は、「青空ダンス教室」というべき状況となってゆく)、「大媽」の経歴調査の結果でも、ダンスの専門トレーニングを受けたことが「大媽」となる主要な理由とはみなせなかった(若いころ公園での社交ダンスに親しんだ、ディスコブームを青年期に経験したなどは頻繁にみられる経験である。他方で、「広場ダンス」の系譜学的研究で指摘される、群集の舞踏現象である「忠字ダンス」文化大革命職の時期にみられた毛沢東への忠誠を表わす集団舞踊や、農村で広くみられる「秧歌」ヤンコ踊りの経験を、現在の「広場ダンス」と連続して語る人物はほぼいなかった)。「広場ダンス」の経験から、より上手に踊れるようにダンス教室に通うなどの事例は見られしたが、それも少数にとどまった。

ダンスの系譜学あるいはスポーツの側面以上に重要なのが、むしろ毎日顔を合わせ、汗を流す関係性の構築にある、と考えられる。確かに、「広場ダンス」への参加動機としてしばしば聞かれる説明は、健康のためという定型句ではあるが、なぜそのグループへの参加を選んだ、持続しているのか、といった点からの説明では、身体を動かす負担の程度(振り付け問題)と、自宅からの距離やダンスの時間と並んで、「大媽」をはじめとするグループの人々との関係が挙げられることが多い。ここで自己を中心とする関係の束のなかに、新たに、職や居住地、教育程度や年齢を超えた関係性を加え、それが毎日ともに汗を流す、おしゃべりをする、悩み(調査では健康や地震や配偶者の両親の介護、子どもへの不満、孫の面倒など)を相談する利害関係のない場を提供していた。この、特定の「広場ダンス」を通じて形成された関係性は、個人と故人の間関係性としてよりダンスを超えた「熟」的關係へと発展する事例もしばしばみられ、家族ぐるみの交際や物品の共同購入グループの形成、ともに海外旅行へ行く中年女性同士の仲間となった事例もあった。ここで強調すべきなのは、あくまでこうした関係性の強化は、「広場ダンス」のグループに所属するメンバーシップによるものではなく、あくまでそれを契機に関係性が発生した、強化された個人間での出来事として発生している点である。

この関係性の構築のありかたをある種の「親密性」形成の方法として捉えることができるのであれば、それは「つながり」を積極的に拡大してゆく中国社会研究の延長上に位置付けることも可能であり、また、その発現の仕方は、商業性住居(売買可能なマンション)の普及による移動と都市の拡大、「独生子女」の結果としての子供世代への注力と選択制の縮小や私人負担の領域を中心とする老人介護問題などを背景とした極めて今日的な問題を表している、といえる。

また、同根の問題としての私人化、高齢化の進む中国における健康の希求を通じてみた、「幸福」の現在的ありかたをも表出している。

この問題については、今後、論文として発表予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 田村和彦	4. 巻 12巻1号
2. 論文標題 日本の人類学による中国研究の現状と可能性	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ICCS現代中国学ジャーナル	6. 最初と最後の頁 90頁、95頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 田村和彦（周星、張玲訳）	4. 巻 4期
2. 論文標題 墓碑在現代中国的普及和“孝子”来自陝西省中部農村的案例	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 青海民族大学学报（社会科学版）	6. 最初と最後の頁 110頁、121頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田村和彦	4. 巻 97
2. 論文標題 “非遗”時代の自文化研究—試論固化的“遺產”概念与面向未来的開放的“生”的記錄	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『人類学視野下的歴史、文化与博物館—当代日本和中国的理論実践』（Senri Ethnological Studies 97）	6. 最初と最後の頁 187 - 197
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 田村和彦	4. 巻 5
2. 論文標題 「生活」という語で我々は何を捉えたいのか、何が捉えられるのか	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『日常と文化』特集：東アジアの生活改善運動	6. 最初と最後の頁 63 - 71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 田村和彦	4. 巻 5
2. 論文標題 第2部「現代中国における葬儀様式の誕生について」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『福岡大学研究部論集（F：推奨研究）推奨研究プロジェクト研究成果報告』	6. 最初と最後の頁 73 - 77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 田村和彦
2. 発表標題 從一個研究者視点来看当代日本民俗学的新動向
3. 学会等名 「民俗学与当代社会」シリーズ學術サロン、（南方科技大学 社会科学高等ハイエンド學術フォーラム（Web開催）（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 田村和彦
2. 発表標題 日本民俗学与物質文化研究 / 博物館の試論
3. 学会等名 中日韓民俗博物館の現状与未来」學術フォーラム 中国伝媒大学（北京）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田村和彦
2. 発表標題 中日両国の田野經驗与展望
3. 学会等名 中日人類学學術研究研討フォーラム」中央民族大学 民族学与社会学院 （北京）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田村和彦
2. 発表標題 現代中国における物質文化の展示の展開と可能性について 国際シンポジウム「中日韓民族学博物館の現状と未来」の経験から
3. 学会等名 日本民俗学会第71回年会（茨城）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田村和彦
2. 発表標題 日本の人類学による中国研究の現状と可能性
3. 学会等名 日中平和友好条約締結40周年記念 第31回愛知大学国際中国学センター(I C C S)シンポジウム(愛知)(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田村和彦
2. 発表標題 民俗学からハワイの日系人墓地を考える ～その1～
3. 学会等名 日本民俗学会第70回年会（東京）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 田村和彦（岩本通弥、門田岳久、及川祥平、田村和彦、川松あかり(編)）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 慶應義塾大学出版会	5. 総ページ数 381頁（担当分は73 - 84頁、204 - 205頁、234 - 235頁）
3. 書名 『民俗学の思考法』	

1. 著者名 田村和彦（岩間一弘編）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 慶應義塾大学出版会	5. 総ページ数 381頁（担当分は149 - 168頁）
3. 書名 「第6章 熊本の「郷土料理」としての中国料理「太平燕」から考える 素材、文脈、文化を「囲い込む」こと、開くこと」『中国料理と近現代日本 食と嗜好の文化交流史』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関